

ヒトラーの贖札(にせさつ)

2007(平成19)年11月28日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



第1章

ハリウッド映画もいよいよ変容か？

監督・脚本＝ステファン・ルツォヴィッキー／出演＝カール・マルコヴィクス／アウグスト・ディール／デーヴィット・シュトリーゾフ／アウグスト・ツィルナー／レン・クトヤヴィスキ／セバスチャン・アーツェンドウスキ／マリー・ポイマー／ドロレス・チャップリン(クロックワークス配給／2006年ドイツ、オーストリア合作映画／96分)

……骨太のドイツ映画の名作がここに誕生！ 国家による史上最大の贖札事件「ベルンハルト作戦」のお勉強だけでもタメになるうえ、極限状態における人間ドラマを体感できるのだからすばらしい！ 船場吉兆をはじめ、すぐにバレる安っぽい偽装ばかりの日本だが、こんな映画から、しっかりと人間の生き方を学ばなければ……。

映画は勉強だと痛感！

世の中には中高生や大学生が毎日映画館通いをしていると、「遊んでばかりいないで勉強しなさい」と怒る親がいるが、私に言わせれば、それは大まちがいがい！ 映画館通いをしているあなたの息子や娘は、映画を観ることによって実にさまざまなものを学んでいるはずだ。もっともそれは、観客全員ではなく、それなりの問題意識と感性をもっている人で、かつ鑑賞後まじめに勉強する人でなければダメ。私は中学時代から毎週のように映画館に通い3本立てを観ていたが、映画雑誌等による勉強の方もバッチリ。そんなまじめな勉強の癖が今も生きているが、この映画はそんな勉強のネタでいっぱい。つまり、「こんな話、俺は今まで知らなかったなあ」と思い知らされることばかり……。しかし、知らなかったということは恥でも何でもない。この映画を観て勉強し、知ることができれば、それは私にとっての大きな財産。

「ベルンハルト作戦」とは……？

この映画は、ナチスドイツが実際に実施した国家による史上最大の贖札事件である

「ベルンハルト作戦」をストーリーの軸とし、その中で展開されるギリギリの人間模様をスリリングに描いたもの。そこでまず勉強しなければならないのは、その作戦を実施したナチス親衛隊（SS）の海外諜報部門第6局で偽造旅券や証明書類の偽造を担当していたベルンハルト・クリューガー少佐の名前を付せられた「ベルンハルト作戦」とは何かということ。もちろん私もはじめて勉強したことだから、知ったかぶりをしてここに「孫引き」しても仕方ないのは当然。プレスシートには、私も今回はじめて知った「紙幣研究家」という肩書の植村峻氏による「映画では描かれなかった『ベルンハルト作戦』」と題するコラムがあるから、まずはそれを読むかネットを検索して勉強してもらいたい。

コラムから学んだ3つのポイントは……？

このコラムから学んだ私なりのポイントは次の3つ。すなわち、①贋札によって敵国の経済を混乱させるという戦略は、ナポレオン戦争やアメリカの独立戦争の時からあったこと。②イギリスのポンド札は比較的偽造しやすかったため、本格的にすごい量の贋札が製造されかつ行使されたこと。③これに対して米ドルは偽造が難しかったため、この映画の結末は実話とは全然異なっていること。

ちなみに、日本陸軍による「中国法幣」の偽造や、太平洋戦争時のアメリカによる日本向けの「伝單」の精度はどの程度……？

天国から地獄へ……

映画の冒頭、これは一体どういう意味なのか、ちょっとわかりにくいシークエンスが2つ続いていく。この映画の主人公はユダヤ系ロシア人のサロモン・ソロヴィッチ（サリー）（カール・マルコヴィクス）。彼は秀でた芸術的才能を利用してパスポートや紙幣などあらゆる偽造を行う贋作師だ。最初のシークエンスでは、モナコのモンテカルロにある一流ホテルに入った彼は、スーツケースから札束を取り出し、次々とそれを貸金庫へ。そしてカジノで派手に賭けるサリーの姿と、それに注目するカジノの令嬢（ドロレス・チャップリン）の姿が映し出される。当然のように2人はそのままベッドイン。その時彼女が発見したのは、サリーの腕に刻まれている囚人番号。ということは、この男は……？ どうもこれは、終戦直後のことらしい。

次のシークエンスはベルリンの夜のまち。そこでサリーは最後の仕事をして、また

拠点を変更するつもりらしい。しかし、最後の依頼者の女性アグライア（マリー・ポイマー）はチョー美人。その美しさに惹かれたサリーは彼女とダンスを楽しんだ後、そのまま仕事場でベッドイン。これはどうも、1936年のことらしい。

どうもそれがサリーを天国から地獄へ突き落とすことになったようだ。翌朝仕事場に踏み込んできたのは、犯罪捜査局の捜査官フリードリヒ・ヘルツォーク（デーヴィト・シュトリーゾフ）。これによって、逮捕されたサリーはある日、ザクセンハウゼン収容所へ移送されることに。他方、有名な贋作師サリーの逮捕によって、ヘルツォークは出世し親衛隊（SS）に入り、今や極秘任務を指揮する立場に……。

収容所でも、現実派 vs. 理念派の対決が……

以上のイントロ（？）を経て、映画はいよいよ本題のベルンハルト作戦に。その極秘任務を指揮するのは、サリーを逮捕したヘルツォーク。ベルンハルト作戦の第1の目標は、完璧な贋ポンド紙幣を大量につくり出すこと。そのため、サリーたち技術者には清潔なベッドと温かい食事が与えられ、快適な職場と居住空間が保証されていた。しかし、ベルンハルト作戦を完遂することは祖国への裏切り。他方、その仕事を拒否することは自らの死を意味していたから、囚人たちのギリギリの選択は如何に……？

もちろんサリーは「現実派」だから、生きていくためその任務を忠実にこなしていた。サリーと一緒に列車でザクセンハウゼンの収容所に送り込まれた美術学校生のコーリヤ（セバスチャン・アーツェンドウスキ）もそれは同じ。ところが、いつの時代でもどんな状況下においても「理念派」がいるもの。その典型が、ユダヤ系スロバキア人の印刷技師であるアドルフ・ブルガー（アウグスト・ディール）。彼は贋ポンド紙幣の完成までは仕方なくベルンハルト作戦に協力していたが、次の目標である米ドル紙幣の贋札づくりには協力を拒否し、サボタージュを呼びかけることに。

こころあたりの心の葛藤がこの映画のハイライト。したがって、それは私の評論で味わうのではなく、スクリーンを実際に観ることによって味わってもらいたい。極限的状况に置かれた中でのギリギリの人間の選択はどうなるのかについて、いろいろと考えさせられるはずだ。

敗色濃い中、ヘルツォークの選択は……？

収容所の中におけるストーリーのメインテーマはサリーとブルガーとの対立だが、

もう1つ結核に冒されたコーリヤをめぐる人間ドラマも展開されるので、それにも注目。そこで面白いのは、しっかり者のサリーはヘルツォークとの間で、コーリヤの薬をもらうかわりにヘルツォークとその家族が国外へ脱出するためのパスポートを偽造してやるという取引を成立させること。しかし、ヘルツォークが秘かにそんな小細工をしたのは一体なぜ……？ そしてコーリヤの命は……？

収容所の解放と、その後の生き方は……？

西に侵攻してくる連合軍（＝ソ連軍）が徐々に近づいていることは、ナチス兵たちの慌ただしい動きでわかっていたが、今や砲弾の音が聞こえてくるまでに。さあ、そこで収容所の指揮官がいかなる命令を下したのかは、収容所の中から物語を組み立てているこの映画では明らかではない。しかし、少なくとも「囚人たちを全員射殺せよ」という命令がでなかったことはたしかなよう……。

しかして、サリーたち技術者たちが入っている贋札工場の扉が今打ち破られたが、そこでサリーたちが見たものは……？ これによってそれまでの生活が完全に終了したことだけはたしかだが、サリーたち贋札工場の中で生き延びてきた人たちは、これからどのように生きていくのだろうか……？

アドルフ・ブルガーは90歳の生き証人！

アドルフ・ブルガーの腕に黒く残っている「64401」という5桁の番号は、強制収容所で刻印された囚人番号。今なお腕に残るそんな刻印をもつアドルフ・ブルガーが、2007年11月来日し、東大駒場キャンパスでナチスの贋札づくりに加担していたことを証言し、大学生との世代を超えた交流をしたことが、2007年12月9日付日本経済新聞に掲載された。この映画のプレスシートには、この映画の俳優たちが勢ぞろいした写真が載っているが、何とその中心にいる小さな男性が今年90歳になるというアドルフ・ブルガーその人だ。アドルフ・ブルガーを演じたアウグスト・ディールは、1976年生まれの高背が高くカッコいい若者だが、ホンモノのアドルフ・ブルガーは背が低く小柄な老人。しかし、今年90歳のその老人が語る生き証人としての言葉には、ものすごい重みがあったはず。

邦画復活を印象つけた2006年は、『男たちの大和／YAMATO』（05年）のような大ヒット兼問題提起作があったが、2007年の邦画は10億円以上のヒット作がたくさん

生まれているものの、そのほとんどが軽薄短小なものばかりで、『ヒトラーの贋札』のような問題提起作は少ない。日本人がもう少し利口になり、真の国際人になるためには、難解であってもこういう映画を観て勉強する必要があるのでは……？

ドイツ映画の名作がまたひとつ……

私の独断と偏見によれば、フランス映画はおしゃれで小粋な作品と小難しい作品が併存している。これに対して、ドイツ映画はあるテーマを真正面からドンと見据えた骨太の作品が多い。最近のそんなドイツ映画の名作が、『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）、『ブラックブック』（06年）、『みえない雲』（06年）、『ドレスデン、運命の日』（06年）、『4分間のピアニスト』（06年）、『善き人のためのソナタ』（06年）等々だが、ここにそれに連なる名作が誕生！ プレスシートによると、ドイツ・アカデミー賞では、最優秀監督賞、主演男優賞、助演男優賞、脚本賞など主要7部門にノミネートされたとのことだから、その朗報が待たれるところ……。

2007(平成19)年12月12日記

またここに、ドイツ映画の名作が！

りは歴史的には常態だが、「バルンハルト作戦」による英国ポンド紙幣の偽造は大規模で精巧なものだった

らしい。選ばれたユダヤ人探偵者たちに清潔なベッド温かい食事が与えられたの

は、完璧な贋札作りを成功させるため。もし任務が達成できない場合のガス室送り必死だった。贋ポンド

札の成功に続いて来ド札の偽造に入った時、収容所に囚われたのが、協力者拒否！サボターージュすべきか

今、収容所にもはっきりと連軍の砲弾の音が聞こえてきた。収容所の解放は間に合うか？ すると、完成した贋ポンド札は一体どこに？ サリーの数奇な人生を軸に描かれる人間ドラマは絶品！ またここに、ドイツ映画の名作が誕生した！

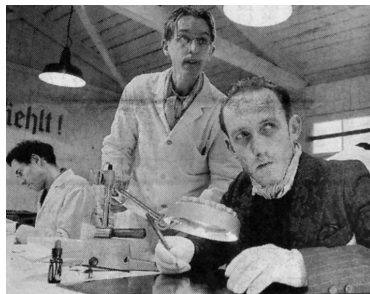
ナチスドイツによるユダヤ人への迫害は歴史的な悲劇だが、それが人間の本性を深く映画の格好のテーマとなることも事実。昨年十一月に来日したスロバキア生まれのユダヤ人アドルフ・ブルガー氏は、腕に「64401」の囚人番号が刻まれ、「拒めば射殺」という過酷な状況下での贋札作りの体験を東大で学生たちに語った。日本陸軍による中国法幣、アメリカ軍による米軍など国家的な贋札作



弁護士 坂和章平

にせきつ ヒトラーの贋札

あすから数島シネポップで公開



否かを争点とした現実派サリーと理想派ブルガーとの対立。極限状況下での二人の対決シーンはこの映画のハイライト。見事な人間心理の描写をじっくりと味わいたい。

他方、ドイツの敗戦を予見し指揮官が国外へ脱出用の偽造パスポートをサリーに作成させるエピソードにはヘドが出そうだが、逆に人間味タップリで興味深い面も。

大阪日日新聞 2008(平成20)年1月25日